

---

# VK（ヴァンパイアキラー）ヴァイエント

北岡 白

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】 ヴァンパイアキラー VKヴァイエント

### 【NZコード】

N5235W

### 【作者名】

北岡 白

### 【あらすじ】

時の支配者は吸血鬼ヴァンパイアであつた。人々に抗う力はなかつた。しかしヴァンパイアを倒せる者の存在がいた。その存在はダムピール。ヴァンパイアと人との間に生まれし灰色の存在。

15歳の少女マリー・フローベルはヴァンパイアに襲われる。そして目の前で家族を殺され、自らも強姦される。運よく、命だけは助かつたマリー。しかし彼女の心には大きな傷と復讐の憎悪が生まれた。そしてヴァンパイアを狩ることを生業にしているダムピールが住むデブリの街を訪れる。そして自分と家族の仇のヴァンパイア

の抹殺を依頼をするが誰も引き受けられなかつた。なぜならマリーを襲つた連中はヴァンパイアの中でも最古からの権力を持つたデルモンド一族の者であつたからである。途方にくれるマリー。断られ続けながらも何度も何度も頼み込む。しかし結果は変わらなかつた。ある日、マリーとハンターのやり取りを見ていた街の住人がマリーにある噂を教える。街のはずれの山の頂にどんなヴァンパイアでも殺すヴァンパイアキラーが住んでいると。そしてマリーはその噂をたよりに山の頂上を目指す。

## プロローグ

絶対恐怖。

それは捕食者の存在。被食者にとつてそれは避けられない。

人は英知を駆使して食物連鎖の輪状から外れ、地上で絶対捕食者として君臨しているように思えた。

それは表面上の出来事に過ぎなかつた。

人は被食者であつた。

そう……人は吸血鬼ヴァンパイアの被食者にすぎない。

その存在に恐怖する。絶望する。

そして奴隸という名の家畜に成り下がる。

高度な知性と強靭な身体能力を持つ人に似て非なる存在に捕食される。

生物の君臨者はヴァンパイア。人々はそう思つた。ヴァンパイアもそう自負していた。

しかしそれもまた眞実ではない。

人とヴァンパイアの間に生まれし灰色の存在を忘れてはならない。どちらにも受け容れられない。

どちらにも属せない。

なぜならどちらも脅かす存在だから。

それを人々はダムピールと呼ぶ。

## 一章 一節

はじめまして。私は、サイツィアーベアリムと申します。

皆は私の事をサイツと呼んでおりました。私が若いころ靴職人としてデブリの街に放浪の旅をしていましたときの出来事です。それは衝撃的で、今でも鮮明に覚えておりますとも。

デブリの街は通称「狭間の街」と言わされておりました。

どうしてか？といいますと、その住人が特殊な事情の人ばかりだつたのです。人口1万人ほどの華やかな街でした。しかしその華やかさには妖艶なものから心温まるものまで様々で、それはそれは混沌としておりました。なぜなら人口の半分以上がダムピールでしたから。

そうそう知つてありますか？ダムピールのことを？

知らない……そうですか。ではダムピールについて少々お話ししましょう。

とはいっていきなりダムピールのことを話してもお分かりにくいと思いますので、幾つか説明しておきましょう。今の時代どうなのか私には分かりませんが私が若い頃、人は犬や猫はたまた牛や豚のように扱われておりました。

実は昔、人は家畜か愛玩動物ヴァンパイアでしかなかつたのです。

では何者か？といいますと吸血鬼にござります。

その時代、時の支配者はヴァンパイアでございました。ほんとヴァンパイアは末恐ろしい存在でした。血を啜り人を殺しまくると思えば、人を服従させ下僕にして駒にする者。中には愛玩動物に仕立てて性欲を満たすものもあり、人にとつてそれはそれはとても住みにきい時代でございました。

しかも、ヴァンパイアときたら強いのなんの腕に自信のある男が何人も挑みましたが全く歯が立ちませんでした。人々はそれを目の前にしてというもの抗うことをやめてしまいました。

しかしヴァンパイアとて無敵ではございません。弱点もございました。抗つて勝てる可能性がないわけではございません。ただし多くの犠牲を払いますが……。

しかしそんな時代ではございますがヴァンパイアと肩を並べる、いやそれ以上かもしません。

ヴァンパイアにも天敵がありました。

それがダムピールでございます。

ダムピールとはヴァンパイアと人の間に生まれた灰色の存在にございます。皮肉な事ですが人は自分たちを脅かすヴァンパイアの力に頼らないとヴァンパイアを倒す力を手にする事が出来ないので。そしてヴァンパイアも。下等と思っている人との間に生まれし者が自分たちを脅かす存在なるとは……運命とは不思議なものです。

さて、みな様、ここまの話を聞いて疑問が出たのではございませんか？

どうしてヴァンパイアを脅かす存在のダムピールが「狭間の街」なんかに住んでいるのでございましょうか？

実はダムピールには、ある特徴がございます。

それはダムピールは死んでしまうとヴァンパイアになってしまいのです。

しかも我を忘れ、たちの悪い事に本能のままに人を襲います。襲う人たちは生前に関わりの強い人が多いようです。そして生前知った顔の人たちの襲い生血を吸う。稀に吸血行為でなく性行為へ赴く者もありますが……まあ、どちらにしろ人に好かれる行為ではございません。

そのためダムピールのことを人々は「出来損ない」と呼び罵りました。ヴァンパイアも自らを高貴な存在と自負しておりましたので人と混ざった存在が許せなかつたのでしょう。彼らは「混じり物」と罵つておりました。

彼らダムピールは弱い存在でございました。どちらからもその存在を受け容れられない。彼らが罪を犯したわけではありませんのに。

そうやって迫害されたダムピールが一人、また一人と安息の地を求めて集つて出来た街が「デブリの街」と「狭間の街」の所以でござります。

デブリの街には様々な悩みを持つ人達で賑わっておりました。その悩みを持つ人々はどこか悲しくもありましたが、それ以上に魅力を持ち合わせておりました。特に私が印象的だったのはダムピールの男性と一人の人の少女でござります。今でもよく覚えておりますよ。まるで昨日のように。

そう、あれは今日のよつに寒い寒い吹雪の夜でござりました……

1476年12月23日 サイツァーベアリム・ブラド 日記より

## 一章 序

ここ、デブリの街こと狭間の街は、街明かりが夜をも照らす眠らない街。真昼間もお構いなく犯罪が起ころる街。善と惡の狭間に佇む街。

12月の暮れ、白い雪に覆われたデブリの街でもクリスマスの準備で賑わいをみせていた。そんな街の賑わいの中に1人の少女が俯き加減にふらふらと街を歩く。下を向いて顔ははつきりと見えないが栗色の綺麗だったと思われる髪は無残に乱れている。服もあちらこちら破れ半身、裸に近い露あらわな姿であった。そして露出した肌は青紫に変色し打撲のような痕がいくつもみられた。そして左手には金属のブレスレットがはめられていた。そのブレスレットは手錠のように施錠されている。それは吸血鬼の愛玩動物を意味している。そして少女は凍るように冷たい街のタイル路を素足でとぼとぼと歩く。足は凍傷をきたしていた。しかしその様子を心配する者はいなかつた。不振がる者もいなかつた。そして手を差し伸べる者すらない。それが狭間の街と呼ばれるデブリの街。

少女は街のはずれにやつて來た。

「この山を越えたら私の望みが叶う」

自分に言い聞かせるようにひとり呟いた。

少女の顔が歪む。

山は雪に覆われている。冷たく痛いタイル路より遙かに山の積もつた雪は少女に痛みを突き刺す。このヨーロッパの大地に頂く山岳を防寒具、一切纏わない格好で挑む少女の姿は無謀であつた。だが彼女から、こみ上げる熱い意志が彼女を前へ前へと突き進める。

少女は頑張つた。しかし自然はそれほど甘くはない。登るにつれ吹雪は強くなり視界は遮られた。山の中腹であるうか、とうとう少女の氣力と体力は限界を超えた。そして意識が薄れていった。

少女は思った。

ここで私は死ぬんだ。

神様どうして私にこんな残酷な仕打ちをされるのですか？

……

マリー・フロー・ベルは「ゴシック様式の美しい一室のベッドの上で目を覚ました。

パチ　……　パチ  
パチ　……　パチ　……

暖炉から小刻みに、燃える薪の音が疲れた身体に心地良い。ふと我に返る。

私は死んだの？　ここは天国？　一瞬考あおえたが、暖炉から伝わる丸味のある暖かさはマリーを現実へと圧し留める。

ゆっくりと部屋を見渡す。部屋中の央に丸いテーブルがあつた。その上に自分が着ていた服の原型を留めない檻はやしき切れが綺麗にたたんであつた。マリーの記憶が混乱する。もしかして私、何も着ていない？　急いで自分の身体を見る。いつの間にか、男性用のシルクで出来た白いシャツを着せられている。マリーは左手を見つめた。冷たいブレスレットは今も取れていない。脳裏に負の感情が過ぎる。ブレスレットを見つめ咳いた。

「結局……捕まってしまったのね。こんな事なら死んでしまえばよかつた」

マリーの頬を涙が伝わる。そしてベッドの上に横たわる華奢な身体が小さく小さくなつていった。

部屋の中は静まり返った。

そして再び

パチ　……　パチ  
パチ　……　パチ　……

暖炉の中で燃える薪の音が部屋を支配していった。  
それから1、2時間ぐらいが経過しただろうか？

トントンー

「一」

マリーは毛布の中に身体を丸める。

トントンー

突然、ドアをノックする音が静まり返った部屋に響く。

ガツチャ

真鍮製の扉の取っ手がゆっくりと回る。床に敷かれた絨毯を踏む靴音が近づく。

靴音はマリーのベッド前で止まる。

マリーを覆う毛布がゆっくりと剥がされる。

「ひつ！」

小さな悲鳴があがる。

「起きてこるのは思わなかつたんだ。驚かせてしまつた。悪かつたね」

「どうやら男のようだ。声は穏やかな口調だつた。マリーは恐る恐る目を開ける。

マリーの前には屈託のない笑顔を向ける青年がいた。青年は黒髪に黒い瞳を宿していた。そして細く整つた顔立ちと身体、髪と瞳に同調するように黒い執事服が良く似合つていた。

全体の黒の中にシルクの白シャツがアクセントを付けていた。どうやらマリーが今着ているシャツは彼の持ち物のようだ。マリーの視線がシャツに向いていることに青年は気付いた。

「ああ、服が濡れていたんで着替えをと……ただ、この屋敷は男しかいないから女性用の服がなくて……」

青年は苦笑いしながらマリーに説明する。マリーはきょとんして青年の話を聞いた。どうやらマリーは早合点してしまつたようだつた。自分でもだいぶ参つてゐるのだろうと思つた。少し落ち着いたマリーは黒髪の青年に尋ねた。

「あの……すいませんが、ここはどこなんですか？」

「ああ、『めん。』にはマリーの屋敷だ。ああつ、それと僕は『じ』で執事をしているパーソン。宜しく」

黒髪の青年はパーソンと名乗った。それによく分からぬ屋敷の名も。

「パーソンさん、マリーの屋敷って……？」

「パーソンでいいよ。みんな僕の事はそう呼んでいるから」

フランクに話すパーソンにマリーは不意打ちをくらつた。

「そ、そんな、私より年上の方をそんな風に呼べません」

「別に構わないよ。それに『さん』付けて慣れてなくて、こそ痒

いよ。そうそう、そう言えば君の名前を知らなかつた」

「申遅れました。私はマリー・フローベルと言います」

「じゃあ君のことばマリーって呼ぶから僕の事もパーソンって呼んでよ」

「わかりました。パーソン、といふでマリーの屋敷っていうのは何ですか？」

「ここにはヴァイエント・オリマード家の屋敷。名前が長いから通称マリーの屋敷。なんでマリーじゃないの?って言つ突っ込みはいらないからね」

自分の会話にうけたらしく、けらけら笑うパーソン。しかしマリーの反応は別の場所だった。

「ヴァイエント!」

その言葉を聞いて毛布を握り締めていたマリーの手がぶるぶると震えだす。

「も、もしかして。ここにはヴァンパイアキラー様の住まれる屋敷ですか?」

興奮のあまり上手く喋れない。

「そう。ここにはヴァンパイアキラーの屋敷だよ」

「あ、ああ、そ、そ、その……」

さらに興奮が高まり、口が呂律して言葉にならない。

その光景を見たパーソンは先ほどのチャラけたムードがなくなり

急に真顔になつた。

「マリー。話したい事は色々あると思つけど、流石に山で遭難しかけたんだ。心も身体も疲れている。どのみち今日は面会出来ない。だから明日に備え今日はゆっくりとお休みなさい」「

すべて分かつていつにパーソンがマリーを諭す。

パーソンの言葉が効いたのかマリーは落ち着きを取り戻していった。

「あの、遭難していた私を助けてくれたのはパーソンなんですか?」「いや、僕じゃない。助けたのは、この屋敷で働く同僚さ」

「そうですか。明日、その方にお礼を言わなくちゃ。会わせてもらひえますか?」

「もちろん」

「ありがとうございます。それではパーソン。私、明日に備え休みます」

「うん。それが良い」

「パーソン、おやすみなさい。そしてありがとうございます」「

「おやすみ、マリー。君に良き明日が来ますよ!」

パーソンは部屋を出た。退室際もマリーへ笑顔を絶やさなかつた。再び部屋はマリー一人となつた。

パチ  
パチ  
……  
パチ  
パチ  
……  
パチ  
パチ  
……  
パチ  
パチ  
……

暗黙に戻つた部屋、再び薪の燃える音が戻る。

「パーソンか……」

マリーはベッドから天井を見上げ咳く。

もう随分と経つ。人の温かみに触れたのは、久しく愛情に飢えた身体にパーソンの優しさが沁みた。左手を天井に翳かざし、ブレスレットを見つめた。このために私はここまで來たと。そして安堵に満ちたマリーに、今まで黙つて様子を観ていた疲労が一気に騒ぎ始める。

そしてマリーは久しぶりの暖かいベッドで心地良い深い眠りについた。

館の別室。

「どうだった？あのガキンちゃんは？見たところ金も持つてなさそうだし、ガキだから相手も出来そうにねえ。悪いが明日でさよならだ」

野太い声の男がソファーに座り、ぶどう酒片手にパーソンと話していた。

「ファースト、実はまだ君に言つてない事があるんだ」

「ほお、もしかしてブレスレットの事か？たしかにブレスレットの刻印は俺らにも関係あるが、娘と俺らの間には何ら関係はねえ」  
ファーストを呼ばれた男が答えた。

「いや、それとは違う。もっと重要な事だよ。……彼女、2回目なんだよ」

「おいおい」

ファーストの持っていたグラスの動きが止まる。

「100年ぶりだよ」

「まさか、あんなガキンちゃんがか？」

「ぼくも最初、驚いたよ。疑つてみたが、やはり間違いない」

「そうか。それが事実なら色々せねばならんな」

「ああ、そうだね」

ファーストはグラスを手で転がしながら揺れるぶどう酒を見つめながらパーソンに言った。

「……事実だったとして、前回の失敗があるからな。明日、俺の目で確かめてみる。慎重に越した事はないだろう」

「確かにそうだね。ところでファースト

「なんだあ？」

「もし受け容れた場合、彼女どうする？」

「そうだな……」



# 一章 ?

現在、マリーはテブリの街にいる。

経緯はこうだ。

昨日の遭難から一転し、VJの屋敷で一夜を明けた。結局、目覚めたのは午前10時過ぎだった。今までの疲れから一気に解き放たれたようだった。それから間もなくしてパーソンがマリーの部屋を訪ねた。街で買った婦人服をマリーに渡し、着替えたらい階の食堂へ来るよう言われた。マリーは婦人服に着替え、一階の食堂へ移動する。

食堂ではパーソンがマリーのために食事を用意してくれた。もう何日もまともに食事を取つていなかつたマリーは勢いよく食べる。いや食べるというより大男が食い物をガツつく光景に似ている。それほどまでに飢えていたのだ。その光景をパーソンはにこにこしながら見つめる。パーソンの視線に気付くマリーは赤面し食事の速度を緩めた。さらにパーソンはにこにこする。

食事も終わりパーソンの入れた紅茶を飲み、ようやく一息ついた。「マリー、この後なんだけどね。ある人に会つてもらおうと思つ」マリーの飲みかけの紅茶をテーブルに戻す。

「あの、それって？ ヴァイエントさんですか？」  
「うーん。当たりのような、ハズレのような」

「??？」

困惑するマリーを見て笑うパーソン。

「まあ、会えば分かるよ」

そう言われパーソンにファーストの部屋まで連れられたのが4時間前となる。

屋敷、本館二階の東にある部屋。

「……」「

マリーの前に男が机に肘を突いて手を組んで椅子に座っている。男はがつしりとした体つきで凜々しい印象を受けた。そして、ヴァンパイアハンターが好んで被るハンター帽を深く被っている。帽の間から覗く赤い癖毛と鋭く光っている眼差しから屋敷の主とマリーは感じた。

さらに田を引くのは、今居る部屋の様子である。部屋一面にある本棚は、ぎっしりと本で埋め尽くされている。この屋敷に相応しい書斎に見える。がしかし男とマリーの間には直径10センチもある鉄の棒で出来た鉄格子が存在する。その鉄格子を挟んで男とマリーは座っているのである。そして男の前には立派な机があり、マリーの目の前にある小さな机とピッタリと合わさっている。そして机と机の間に縦20センチ横30センチほどの空間が存在する。丁度、食事用の大皿一枚が通れる大きさだ。それはまるで囚人の牢屋のような、両替商が営む金庫のような、重々しい雰囲気だったのだ。さらにマリーの座っている場所の右手には2つの部屋を結ぶスライド式の檻の扉があるのだが、不思議なのは鍵の施錠側がマリーのほうに付いているのである。

そしてその扉の位置のさらに奥、あるものが不気味に存在を強調していた。

棺桶である。棺桶は、ヴァンパイアの就寝道具である。しかしダムピールには必要ない。いや、その前にこの男が人なのかダムピールなのかも分からない。もしかしたらどちらでもない可能性もある。このダムピールの住む街でヴァンパイアキラーを名乗る者、ただそれだけでダムピールと決め込んでしまっていた。しかも壁に立て掛けられ棺桶の周りには鉄の柱やら、ボルトか、くいか分からぬパーツが幾つも組み合わされて、棺桶を覆い尽くす大きな鍵となっていた。

まさに牢屋だった。そして牢に閉じ込められているのはマリーでなく男のほうなのだ。一体全体どうなっているのか部屋に入ったマ

リーには分からなかつた。

「ファーストだ」

突然、男が喋つた。

「えつ？」

「ファーストだ。この屋敷の責任者だ」

『ヴァイエント・オリマード』じゃない。どうゆつ事？』

ファーストの鋭い眼は少女の微妙な表情を逃さない。

「ヴァイエント・オリマード」は我々の雇い主であつて殺し屋ではない

はない

「雇い主？」

「そうだ。彼は雇い主に過ぎない。そして殺し専門は俺らの仕事だ。俺は仕事に関しては、全ての権限を持つている」

「じゃあヴァンパイアキラーというのはあなたの事ですか？」

「街の噂ではそういう事になるが実際は俺らだ。そもそもハンターが殺らないようなヴァンパイアを殺<sup>や</sup>るんだ。一人で勝てる相手じゃない。それともヴァンパイアキラーは超凄腕のハンターと思つたか？俺個人も強いが相手が相手だ。俺らは街の小遣い稼ぎどもとは違う

ファーストの話を聞いて、確かにそう思つた。ハンターが引き受けない仕事をするのだ。そうなると相手の主流は大物となる。相手は部下を引き連れている。1対1の戦ということは限らないのだ。では、ファーストさんに依頼を頼めば引き受けてもらえるのですか？」

「ああ、ただし、それなりの対価を頂く。で、穰ちゃんはどれくらい支払ってくれるんだ？ちなみに死にかけてまで遠路遙々、山に登つてくる奴は腐るほどいる。大抵そのままお帰りコースだが。で今いくら持つてる？」

「その…今はお金持つていません……でも、ちゃんと働いてお金払いますから」

ファーストの口元がニヤツと開く。

「 3千万クラウンだ」

「 さ、さ、 3千万！」

マリーの声が裏返る。要求された金額はあまりに高額であった。一家族の平均年収が2万8千クラウンである。一生かかっても支払えない額である。

「あ、あの。その、そんな大金……。あのお金の代わりになるものは……」

「 ああ、あるぜ。身体で支払つてもうつこともある。ただし18歳未満はお断りしている。どう見ても穢ちゃんは歳が足りてないよう見えるが。歳はいくつだ？」

「 ……昨日で16歳になりました」

「 そうか。それはおめでとさん。残念だが誕生日プレゼントにしてやることはできねえ。仕事は仕事だからな。まあ祝いに今着ている服を持つていきな。それじゃ話はここまでだ。さあ帰つた帰つた」 ファーストがマリーに退室するよう手でジェスチャーする。

「 ま、待つてください。なんでもしますので、依頼を引き受けください。それに私にはもう帰るところがないんです」

「 だろうな。穢ちゃんみたいなブレスレット付きの事情はよく知つてゐる。だがそれとこれとは別だ。街には穢ちゃんみたいなのがわんさかいる。この街まで奴らも追つてこまい。下手に逆らうより、ずっと安全だせ」

「 ……」

「 ……それに穢ちゃん。その輪つかを付けた相手を知つてるか？」

「 ……いえ、知りません」

「 その輪つかに刻まれた紋章はベルモンド家のものだ。ベルモンド家は最古から続く純血の一族だ。吸血鬼世界でも強い影響力を持つ。そんな奴に牙を向く奴なんて誰もいねえ。色々辛い目にあつたんだろうが、生まれ変わつたと思って、この街で一から始めたらどうだ？」

たしかにそうかもしれない。自分の目の前で家族を殺され、そし

て犯され愛玩動物の印まで押された。しかし今こうやって生きている。そして、この街に居れば、そんな事から開放されるかもしれない。

仮にファーストが依頼を引き受けてくれたとして倒せる相手なのか。

いや敵う見込みはないだろう。

どんなにこのヴァンパイアキラーが強くても相手は最古からの君臨する一族。そんな奴らに敵うはずはないだろう。

敵う相手でないだろう。

でも…

それでも…  
たとえ殺されたとしても。

「それでも… 私は自分と家族のために仇を討ちたい」

しばし沈黙となつた。

「仇を討ちたいそうだ。どうするよ？」

沈黙を破ったのはファーストだった。

そしてファーストの居る部屋、マリーから見て左端に位置する扉がゆっくりと開く。

現れたのはパーソンだった。

「なんとかならない？ ファースト」

「相手が相手だぞ？」

「僕らはどんなヴァンパイアをも狩るヴァンパイアキラーじゃなかつたの？」

痛いところを突かれたようでファーストの顔が滲つた。

「流石にタダという訳にはいかねえ」

「そうだファースト。いい事を思いついた」

そう言うと パーソンがファーストの耳元で何か喋つていて。そ

れに答えるようにファーストが頷く。

それから程なくファーストが机から羊皮紙を取り出し、羽ペンで何やら書き始めた。数分ほどして書き終えると封蠅と印璽を使い手紙の封が閉じられた。

そして鉄格子の開口からマリー側にある机へ手紙を投げた。

「服の仕立屋『ル』と言つたの店。そのマリーダという女に手紙を渡せ。未払い金の請求が書いてある。その場で金をもらうか、マリーダを屋敷まで連れてくるかどちらかしら。そしたらお前の依頼を考えてやつてもいい」

「ほんとうですか？」

「ああ、ほんとうだ。ただし金か女、貰つてくるか連れてくるかしないと話はチャラだ」

「わかりました。ありがとうございます」

「礼ならパーソンに言つてやれ。パーソンの口添えがなければ今頃とっくに帰つてもらつているところだ」

ファーストはそう言つとパーソンが入つてきた扉を使って部屋から出た。

部屋に残されたマリーをパーソン。

「マリー、よかつたね」

「ありがとうパーソン。ファーストさんに取り持つてくれて」

「いや、そんな事はないよ。なんだかんだ言つて最終的にファーストが許可を出したんだから、あくまで僕は一意見を提案しただけに過ぎない。お礼なら、ちゃんと仕事を果たした後にファーストに言ってやつてね。ああ見えてシャイだから

「はい」

「それじゃあ、屋敷の門まで案内するよ。あと山の夜道は危険だから街を出るのは遅くとも3時過ぎまでだよ」

「わかりました」

マリーとパーソンは屋敷の門まで一緒に歩いた。

「あの、ひとつ聞いてもいいですか？ ファーストさんもパーソン

もダムピールなんですよね？」

門まで行く道中、ふとマリーは尋ねた。なぜならファーストの居た部屋にあつた棺桶が気になつたからだ。

「そうだね。上手く言えないんだけど僕は人間、彼はヴァンパイアなんだ」

「えつ」

「びっくりしただろ。実は僕たちダムピールじゃないんだ」  
正直、驚いた。パーソンはともかく、まさかファーストがヴァンパイアだったとは。

「ああ、ファーストは人の血とか飲まないから。というより飲めなからね彼」

「そうなんですか。……ちょっとビックリしました。ヴァンパイアキラーをしている人がヴァンパイアだったなんて」

「街にいれば、じきに慣れるよ。街の人口の割合はダムピールが5割、人が3割、そしてヴァンパイアが2割、それがデブリの街なんだ」

「……」

「この街はね、どんなことでも受け容れる街なんだ。皆、それぞれの事情を抱え辿り付いた。だから、どんな種族だろうが、どんな職種だろうが、どんな事情だろうが、街は関与しないんだ。それが安住の地の証であり揃だから。まあ色んなのがいるから揉め事が多いけどね」

苦笑いするパーソン。マリーはまだ実感が湧かない。

門までは話していたせいで、あつという間に着いた。パーソンから蠅燭ランプをひとつ手渡された。

「一応、持つて行つたほうがいい。出来ればランプは、使わないにこしたことはない。街までは道なりになつていて。今はよく見えるが夜になると方向がまったく分からぬから気をつけろんだよ。昨日、その辺りは体験しているとは思うけど」

「はい、気をつけます。ありがとうございます。それでは行つてきます」

うん、とパーソンが頭き手を振つてマリーを見送つた。

マリーの姿が見えなくなる。いつの間にかパーソンの横にファーストが立つていた。

「ファースト、気になるなら付いていってやつたら?」

「いや、それは必要ないだろ?あの穰けやんなう。どうせ腹すかして帰つてくるぜ」

「そうだね。今日は客人も来るだらうから駆走の準備でもしてお

くよ」

「ああ、そうしてくれ。それじゃ、俺はひと眠りする」

「わかった。帰つてきたら起こしに行くよ」

「頼む」

パーソンが屋敷の方へ向きを変え、戻り始めた。いつの間にかファーストの姿は消えていた。

服の仕立て屋「ルー」は街の商店道から外れた場所にある。「ルー」は街の中でも少ない特注品を仕立てる店であつたため、路地裏という場所に閑わらず容易に場所を見つけることが出来る。

マリーも人伝えに聞き、なんなく店にたどり着いた。そして店内に入る。店内は決して広くないが豪華な造りとなっていた。カウンターに従業員の男が居る。男はマリーと目が合った。「いらっしゃいませ。本日はどの様なご用件でしうつか?」と声を掛けってきた。

特注品を扱う店だらうか、マリーの年齢と成りから男は場違いな客が来たと思つたようだ。

「あの、マリーダさんと言つ方はおられますか?」

「はあ、店主のマリーダはおつますが。ビのよつなご用件でしうか?」

「私はファーストさんの使いで、この手紙をマリーダさんに渡すよう言われたのですが」  
そう言つてマリーは男に手紙を見せた。手紙に付いた封蝋を男は確認する。

「失礼しました。ファースト様の使いの方でしたか。少々お待ちください」

男は店内奥にある階段を上がつていった。それからすぐに男は降りてくる。

「マリーダ様が上の部屋でお会いしたいとのことです。お手数ですが、2階に上がつてもらえませんか?」

「わかりました」とマリーが言つと男が2階のマリーダのいる部屋に案内した。

トン トン

男が扉をノックする。「お連れしました」と男がドア越しに言つ。部屋から「びづき」と声が返ってきた。そしてマリーは部屋に入る。

男はまたすぐに一階へ戻つていぐ。

部屋の中に1人の女性が立つていた。金髪の綺麗なストレートの髪をポニーテールにくくつっていた。そのせいか健康的で活発そうな印象を受けた。

「あんた、ファーストのところの使いだつてね。それで私に何の用？」

「ファーストさんから手紙を渡すよひと言わされました。それと…」

「それと？」

「あ、すいません。手紙に内容が書いてます」

「そう」

マリーダは部屋にあるペーパーナイフで封蝋を開け、手紙に目を通す。

手紙を机の上に置く。

「用件は分かつたわ。それであんたは私に何の用？」

「…はい。その言ひにくいんですがマリーダさん未払いのお金を払つて貰えないでしようか？」

「あんた、名前は？」

「マリーです」

「マリー、私はあんたの事を知らない。この手紙は確かにファーストのものだが、仮にあんたに金を払つてファーストのところに金が渡る保障もない。だからファーストに直接、取りに来るよひと言つてきな」

「それは困ります。もしお金が駄目でしたら一緒に屋敷まで来てください」

「はあ？ なんで私があんたと一緒に山登んなきゃいけないのよ」

マリーダの声が強まる。

「や、それはファーストさんに言われたんですね。お金と貰つようとか。屋敷に連れて来るよひにかと」

「なんですよ」

「そ、それは……」

マリーの声が口ひしむ。

「はつきり、言いなさいよ。それでなんで金を払うか屋敷に行くかなのよ?」「

「……私の。私のためです

「は?」「

「私はファーストさんとある約束をしたんです。マリーダさんからお金を貰うか屋敷につれてくるか。そうすれば、私の願いを聞いてくれるつて」

「事情は分かったわ。でも私には関係ないことよ。私があんたのために金を払う事もないし屋敷に行く事もない。私にとつて何か得になることがあるの?」

マリーダの言つ通りで彼女に得なことは何もない。そう、これはマリーとファーストの問題なのである。しかしまリーダにどちらかの要求を呑んでもらわなければファーストに仕事を引き受けてしまえらくなってしまう。

「私の家族はヴァンパイアに田の前に殺されました。私も辱めを受けました。私や家族をこんな目にしたヴァンパイアが憎いんです。だから復讐のためにファーストさんの力が必要なんです」

「そう。でもあんたみたいのは、この街に腐るほど居るわ。さつきから、あなたの話を聞いていると自分の復讐なのに人に頼りすぎなんじゃないの。ちよつとは自分でなんとかしたら?」

「……」

「あんた、やめたほうがいいわ。そんな中途半端な覚悟、じゃ復讐なんて務まらないよ」

マリーダに突っ込まれ、反論できなくなるマリー。

「そんな事じや復讐なんて無理ね。仕事の邪魔だから帰つておくれ

「……」

「早く出て行きなさいよ。でないと下の店番呼ぶわよ

「……」

「……」

マリーは微動にしなかった。

そしてゆっくりと口を開く。

「私は、私の出来る所から始めます。それが、ビリやつ結果を齎しどう思われたとしても…」

マリーダが使ったペーパーナイフを奪いマリーダの喉元に押し当てる。

「…あんた、そんな事をしてタダで済むと思つてているの」

「いいえ。タダで済むとは思つていません。マリーダさんおっしゃつたじゃないですか。自分でなんとかしたらど。だから自分で出来る事からしてみます。マリーダさん選んで下さー。お金を払うか、屋敷に行くか

「あいにく今、持ち合わせがない」

「では、一緒に屋敷まで行つてもうすませ

「やだと言つたら?」

「ファーストさんは連れてこましたが生死の有無は言つてませんでした

「なるほど」

ペーパーナイフを持つマリーの手が小刻みに震えている。本人は分かつてないようだ。

ただマリーダはその事に気付いていた。

「あー、もう。わかつた。わかつた。私の負けよ。出かける用意するから、その物騒なもんを下ろしなさい」

マリーダが降参の声を上げる。

「ホントですか?」

「ええ、だから早くナイフ下ろしなさい」

マリーはペーパーナイフを下ろしマリーダから離れた。ナイフか

ら解放されたマリーダは部屋の奥から、何やら屋敷に行くための準備を始めた。それからマリーは自分の手が震えている事によつやく気が付いた。

「やつぱり、自分じや何も出来ないんだな

マリーは小さな声で呟いた。

リュックを背負ったマリーダがマリーのところへ走つて来る。

「日が暮れないうちに、さっさと登るわよ

そういうとマリーの手を引つ張り出す。足を止めて立てる。

「あ、あの、ちょっと

「あー、うるさい」といふた

そして一人は山を登つた。

結局、山中で日は落ち蠅燭ランプを使つこととなつたが、マリーダの案内で迷うことなく屋敷に着いた。

屋敷の扉前でパーソンが手を振る。

「暗くなつても帰つてこなかつたから心配したよ

「心配掛け」「めんなさい」

「ともあれ無事でなによりだよ。マリーダさんと一緒に大丈夫とは思つていたんだけどね

「えつ？」

「あ、ああ。なんでもないよ。マリーダさんは何度も屋敷に来た事があるからね。ここの中道には慣れてるから」

「ああ、そういうことですか」「うう

「マリーダさんもお疲れ様です。」足労かけます

「やあ、パーソン久しぶり。ファーストのアホは何処にいるだい？

人を呼びつけておいて

「はは、たしかにそうですね。まことに勝手なんですが既に席についてます」

「つたぐ。無礼な男だよ。マリー行くよ

「え、どうですか？」

「決まつてんでしょ、食堂よ」

そう言つと「ルー」の店を出たときのよう手を引つ張られ食堂に移動した。

食堂には既にファーストが席についていた。マリーたちが食堂に入つてくる。

「よお、遅かつたな。飯が冷えて凍つちまうといふだつたぜ」

「なに言つてんだい。あんたがさつきつけひの店に来りや、済む事だろう」

ファーストの言葉にマリーダが突つ込む。とても金を取り立てる者と取り立てられる者の会話にはみえない。マリーダは空いてる席につく。パーソンに言われマリーも空いている席に付く。それからパーソンが食事を運んでくる。夜の晚餐が始まった。ファーストとマリーダは食事中に世間話を始めた。その様子を見てマリーは記憶を振り返る。

二人は知つた仲のようで金銭トラブルを起こした様子にみえない。次にマリーダの店はも豪華で、とてもお金に困つている様子はなかつた。なのに、なぜ持ち合せがないと言つた。そもそもファーストは手紙を渡したときに、わざわざ手紙の内容を伝えたのか？手紙を読めば相手に十分伝わる。仮に持ち合せがなかつたとしても今の一入をみれば、いつでも支払いは可能と見える。それなのに屋敷に連れてくるというのも不自然である。

つまり考え方の結論は自分以外全員が演技をしていたという結論に至つたのである。

何故？ そう思つた。思考を張り巡らす。皆田検討ががつかない。むしろ、それより「ルー」の店での出来事が脳裏に思い出される。

『…』

マリーは大事な事を思い出す。それはマリーダにナイフを突きつけたことだ。

「ママリーダさん。『ごめんなさい』

突然、マリーが謝る。皆がマリーを見る。

「え、な、何？」

「……演技だつたんですね。店でのこと」

「……そうだよ。まあ下手な演技だつたから、すぐバレるとは思つたけど」「

ばつの悪そうな顔でマリーダは言つた。

「それなのに私つたら刃物を向けてしました。ごめんなさい」「あー、そんなこと。気にしなくていいわよ。別に

「いえ、でも」

ファーストがニヤつきながらマリーを見てこいつ囁つ。

「マリーダに刃物を向けるとは大した野郎だ。殺されなくて良かつたな。そいつダムピールだから、次は刃物向けるなよ

「え！ そうなんですか？」

「まあね。でも別に言う事じゃないし」

「じゃあ、本気を出せばナイフなんて」

「もう済んだことだし、『飯がまずくなるよ。ねつ、もつこの話はおしまい』

そうこうとマリーダは食事を再開した。それに続きファーストも口に食事を運んだ。

マリーは自分がなんだか恥ずかしくなつた。マリーダはダムピールだつた。ペーパーナイフなんて脅威でもなんでもなかつた。結局、マリーダはずっと氣を使つていたのだ。それなのに自分は全く分からなかつた。自分の欲のために人を巻き込もうとした。それなのにマリーダは何事もないように振舞つてくれた。

食事が終わり、一仕事終わったパーソンも席に元つく。

全員の着席を確認したファーストが口を開く。

「さて、約束どおりマリー・フローベルは我々の提示した条件を達成した。今度は我々が約束を果たさなければならない

ファーストの話に固唾を飲むマリー。

「しかしタダと言う訳にいかない。それにすぐに敵討ちに出会えるとは限らない。そこでパーソンと話し合つてマリー・フローベルに

どうしてもうか考えた

そうであった。約束では仕事を引き受けはくれるといったが無償とは言つてなかつた。マリーに不安がつのる。ファーストがパーソンを見る。今度はパーソンが話し始める。

「ファーストの言つとおり、仕事として扱う以上、当然ながら報酬を頂かなければならぬ。話は変わるがこの屋敷は慢性的に家事全般に人員不足だ。そこで考えたのが雇用だ。だからマリーには明日からこの屋敷でメイドとして働いてもらうこととする。期限は敵討ちを倒すまで。どうかなマリー？」

この提案はどう考えても、これはマリーのために考えられている。つまり、敵討ちが済むまで、この家に住んで良いという意味だ。メイドはあくまで、そのための理由に過ぎない。他人の自分がこの人たちにこんなに甘えていいのだろうか。マリーはそう思った。

「どうかなもなにも、そんな甘えて……」

話の途中でファーストが話に入つてくる。

「勘違いするな。たまたま互いの利益が一致しただけだ」

もう、それ以上言わなくていい。そんなメッセージがファーストの言葉から感じ取られた。

「……ありがとうございます。ファーストさん

「ファーストでいい。明日から俺もマリーと呼ぶ。いいな

ファーストは壁のフックに掛けてあつたハンター帽を取り深く被つた。

「よかつたわね。マリー

「はい、マリーダさん」

「決まりだね。じゃあ明日から宜しくねマリー」

パーソンが話をまとめる。

「という訳だ、マリーダ。すまんが急ぎでメイド服の仕立てを頼む

ファーストはマリーダに服の注文を頼む。そしてメロンほどの大きさの皮袋を一袋、マリーダに渡す。袋を開けるマリーダ。中にはクラウン金貨がぎつしづと詰まっていた。

「まいど、相変わらず太っ腹だね。服の大きさ決めるからマリーを借りるよ」

「あとは任せる」

そう言うとファーストは食堂を出て自分の部屋に戻つていった。  
「じゃ、マリー服のサイズを計るから、一緒について来て。パソコン、向こうの部屋借りるわよ」

「どうぞ」

マリーダはマリーを連れ、食堂を出て、すぐにある渡り廊下向かいの応接室へ行く。

部屋に入るとマリーダは背負つてきたリュックの中から巻尺と裁縫道具を取り出す。マリーはやつぱりと思つ。普通、リュックの中にそのようなものは入つてない。段取りが良すぎる。

「あの、マリーダさんは最初から知つていたんですか？」

「え、ああ。薄々だけどね」

「手紙にはなんて書いてあつたんです？」

「手紙を渡しに来た娘に服を仕立てようと思つ。マリーダの目から仕立ててやつてもいいと思つたら、娘と一緒に屋敷に来てくれ」

「それだけですか？」

「それだけ。あいつとは長い付き合いになるから何となくは分かつたんだけどね」

「そなんですか。でも何でそんな事をマリーダさんに頼んだんでしょうか？」

「たぶん、あいつらは最初からマリーの頼みを聞いてやるつもりだったんだよ」

「えつ？」

「マリーみたいな境遇に遭つた娘を何人も見たけど、結局は街で暮らしている。その方が楽だからね。高額な報酬を払つてまで復讐しながら、ここで一から始めれば平穏に暮らせる。なんせこの街を襲撃するバカはいないからね。それにブレスレットをしていても誰も白い目で見る奴も居ない。だから、あんたみたいにバカ正直な奴

が来たのは初めてだつたんじやないの

「そうだったんですか」

「それにね。上級一族を相手にすることは一国や街一つを全滅するぐらい大変なんだ。だからね。綺麗」とじや済まされない。生き残つた奴が報復する可能性もある。下手したら死ぬまで戦い続けなければならぬ。だから中途半端な気持ちじや、務まらないんだよ。だからマリー、あんたを試したんだと思つ

「闘い続ける覚悟があるか、をですか？」

「そう」

マリーに巻尺をあてながらマリーダは答えた。

「マリー、もう廻り始めちまつたら後に引き返せないよ。今なら間に合ひ。どうする？」

……

マリーダに聞いてヴァンパイアへの復讐がそんなに大変とは知らなかつた。自分の甘さを再認識させられた。それが今のマリーの本心であつた。だがマリーの気持ちは変わらなかつた。もしここで復讐をやめてしまつたら、自分自身に負けた気がした。そのまま平穏に暮らすのも悪くないだろう。でもそれは自分から生を否定していくように感じたのだ。

「もう私は一度、死んでいるんです。家族が殺され、ヴァンパイアに襲われた、あの日から。そして今日、私は生まれ変わつたんです。そう一つの希望を手に入れたから。たとえそれが闇の中を突き進むことになつても、その希望は捨てたくない……」

「そう、分かつたわ。もう私はなにも言わないよ。マリー、しつかり頑張るんだよ」

「はい」

マリーダはマリーの髪を撫でた。それはまるで実の姉が妹をあやす様にみえた。



マリーはゾノの屋敷でメイドとして働いて1ヶ月が過ぎた。仕事にも、ようやく慣れはじめた頃だった。

マリーの1日は長い。朝、暗いうちから始まる。まず起きて、屋敷の西にある馬屋と家畜小屋を掃除し、馬や羊、鶏に餌を与える。それが終わると本館北一階のはなれのキッチンでファーストとパーソンの食事を用意する。食事が終わると後片付けに入る。それからすぐに屋敷の掃除が始まる。

屋敷は広いため屋敷の部屋数は分からぬ。分からぬというのはマリーが入室出来る部屋が限定されているためである。マリーの行けない部屋の掃除はパーソンが行う。マリーの任された掃除場所は別館地下3階付きの台所、入浴場所、部屋は本館1階と2階のファーストの部屋とその隣部屋以外全部の計17部屋と中央階段となつている。そのため本館の東に隣接された塔には入ったことがない。高さは本館と変わらないが谷間たにあいの斜面に沿つているため地下3階からなる5階建ての塔である。本館の庭から覗いた事があるが危険なため、外からは近づけない。

掃除は昼過ぎまでかかる。昼は食事を取らない習慣となつてゐる。そのためすぐ洗濯にとりかかる。それにしても今までよく一人でパーソンはこれら全てをこなしてきたのかと感心してしまう。パーソンやファーストの服は特注品が多いため、ほとんど業者に依頼している。パーソンがキッチン場で炭式アイロンを服にあてる。マリーも何度も挑戦したが上手くいかず服を何度も焦がしているのでパーソンの仕事となつた。洗濯した物は外にも干す事があるが、雪の降る今季節は乾かない。

台所場は食事用の釜戸が2基、それから特大の特注暖炉がある。

木をくぐる部分はレバーで開閉式となつてゐる。なんでも高温の燃焼を確保する火室というものが付いてあるそうだ。これの上には金属製のタンクが付いてある。外の雪解け水を貯める貯水タンクと配管で連結されており、バルブをひねつて金属のタンクに水を貯める。そして水は暖炉の火で温められ地下にある浴槽タンクに送られる。このお陰で、短時間で湯を沸かしバスやシャワーが利用できる。さらに労力も少ない。よく考えられた構造となつてゐる。その特注暖炉の前から漏れ出した熱氣で台所場は暖かい。そのため台所場に洗濯紐をたらし、服を乾かしている。

洗濯物が終わるとパーソンから馬車の扱いと護身術を習う。街でのトラブルに巻き込まれないためらしい。それが終わると夕食の準備に追われる。そして夕食が終わり、皆が順々にバスやシャワー、サウナを済ませるとマリーの番となる。それらが終わるとマリーは自由時間を手にするが仕事が終わると疲れてしまい、すぐに床に入ってしまう。これが月曜日から金曜日で続く。土曜日は街に降り、買い物と業者に出したクリーニングを取りに行くため、その日は掃除はない。買物にはパーソンが同行する。日曜日は休みとなつているが食事と風呂の準備はある。

これがマリーの日課であった。ちなみにファーストはといふとほとんどどど屋敷にいない。いや居るのか居ないのかが謎で食事のときだけふらつと現れる。何をしているのか不思議に思うのだが毎日、仕事が忙しく、それどころではなかつた。

夕食後、いつものよつに食器を洗つているとパーソンがやつて来る。

「マリー、明日から4日ほど仕事の内容を変えるから」

「え？　はい。で、明日から何をすればいいんですか？」

「明日から人を招くから午後の仕事はしなくていい。その代わり、明日から毎日、街に行つて人を迎えてほしい」

「わかりました」

「じゃあ、そうゆうことで明日から頼むよ」

翌日の昼、マリーは人の迎えに行く事になった。昼食後、パーソンに表玄関の庭で待つように言われ、食後の片付けが終わると庭へ向う。

扉を開け庭に出ると、そこには一人の男が立っている。  
身長3メートルはあるうか熊のような大男で肌の色はやや灰色がかったり、とても人に見えなかつた。

……

一瞬、怖氣づくマリー。

丁度そこにパーソンがやつて来る。

「マリー、準備できたかい？」

「え、あ、はい。ところで……」「ん？」

マリーは大男に視線を動かす。

「ああ、自己紹介がまだだつたね」

「彼の名はストロングマン。屋敷の同僚さ。ビッククリしただろ？」「はい、あまりにも大きな方なので。はじめましてマリー・フローベルです。この度、メイドとして働くことになりました。宜しくお願いします。え、えつとストロングマンさん」

ストロングマンと呼ばれる大男が会釈する。

「街の人たちは彼が雪男のよう見えることから、フットって愛称で呼んでいる。僕たちも街の人同様、彼をフットと呼んでいる。ね、そうだろフット」

パフットが頷く。パーソンは話を続ける。

「それとマリー。きみが山で倒れているのを彼が助けたんだえ？ 自分を助けた人物がこのストロングマンという男だったのか。意外に事実に少し驚いた。最初にパーソンから同僚が助けたといつていたので、てつきりファーストだらうと思つていた。そうか、

同僚というのはストロングマンのことだったのか。ようやく命の恩人に会えた。

「そうでしたか。ストロングマンさんが私の命の恩人だつたんですね。お礼が遅くなりすいませんでした。その節は助けてくださつてありがとうございました」

またフットは頷いた。

「彼は仕事でずっと屋敷を留守にしていたんだ。マリーが屋敷を掃除している最中に帰つて来たところなんだ」

なるほど、大きな屋敷にパーソンとファーストの2人にしては随分と広すぎると思っていたが、留守にしている人もいたのか。この屋敷にはマリーの知らない事が多い。

「それで一度も会わなかつたんですね」

「そうだね。ところで昨日の話に戻るんだけど、今からマリーは街にフットと一緒に行つてもうう。今までではフット一人で客人を迎えてたんだが、今回からマリーも同行してもらうことになった。ついでに買物もしてもらおうと思つ。フットは喋れないから買い物が苦手なんだ。だからマリーが一緒に行つて彼を補佐して欲しい」やはり彼は喋れなかつたのか。

「わかりました。私は同行して買物をすればいいのですね？」

「そう。フットを見てびっくりする方も多いから」

「なるほど。あ、ごめんなさい。ストロングマンさん」

パーソンの言葉につい納得してしまうマリー。たしかに初対面の人は驚くだろうなと思った。

ストロングマンはパーソンに顔を向ける。声は聞こえないが、2人はまるで会話をしているように見える。パーソンが代弁して言つ。「マリー、ストロングマンじゃなくてフットで呼べってさ」

会話をしていないのに。2人は意志疎通できるのか？

「フットさんと呼べばいいのですか？」

マリーはストロングマンを見る。するとストロングマンはマリーに向つて笑みを見せた。その笑みは不気味な大きな男の意外なお茶

目な一面を見せた。見た目の怖さとは裏腹に、その笑みはとても優しい印象をマリーは受けた。

「じゃあ自己紹介も終わつた事だし、そろそろ迎えに行つてもうおうかな」「うかが

「わかりました。それではフットさん行きましょ」

マリーが歩き始めようとするがパーソンに肩を摑まる。

「ちょっと待つた。まだフットが準備できていないからちょっとで待機だ」

マリーとパーソンはフットの準備が出来るまで庭で待つことになつた。フットは馬屋の方へ行く。準備なのに向故、馬屋に？ マリーの頭の中に疑問符が湧き上がる。

それから5分ほどが経つ。

ザツザツ、ザツザツと雪を搔き分ける音が聞こえてくる。  
その音はマリーたちの方へ近づいてくる。

マリーはフットの姿に驚嘆した。フットは巨大なものを背負つていた。それは鉄と木で出来た4人乗り馬車だった。ただし車輪は付いていないが。その荷台の上には木の板で出来た屋根があり、一人用のベンチが2つ中央に向き合っている。荷台に上るために小さな踏み板が作りつけられている。そして腰には重厚な革で出来たベルトをしており、左右から鉄の鎖が連なっている。その鎖の末端には巨大な除雪道具であるスノープウラの金属刃が2枚、ハの字状に合わさっている。それをフットは引いて来たのだ。スノープウラの幅は4メートルもあった。そのため、フットの歩いた後ろには除雪され大きな道が出来上がる。

あっけに取られるマリー。

「マリー、乗つて

「え、何處です？ もしかしてフットさんが背負つているあれ「にですか？」

フットの背負つたリュック型馬車を指差す。

「そう、あれ

パーソンに急かされ、馬車の上に乗るマリー。

そしてマリーを乗せたフットはゆっくりと歩き出した。

3

街に降りる山中、ずっと無言だった。なにせフットは喋れないし、背中の馬車に乗っているためフットの反応を見ることが出来ない。仕方なくマリーは馬車から、後ろで除雪される山道を眺める。雪が積もっていたので分からなかつたが、山道はかなり広さがあった。

街の入口に着くとフットは腰に巻いていたスノープウラを外すが馬車はそのままを背負つて歩く。マリーは街に入てからマリーは馬車を降り、自分の足で歩く。フットはマリーに手招きする。どうやら付いて来るようつに言つてゐるらしい。フットの後をとことこ歩くマリー。30分ほど北西に歩き街の城砦近くまで歩く。街は王権制度でないため、もちろん城はない。しかし自衛のため重厚な城壁を備える。最北西の城壁近くに街の倉庫がひしめく。その一角から一本の通り道がある。そうやら、そこからしか通る事の出来ない通りのようだ。そこから今度は真っ直ぐ東へ突き進む。すると直ぐに妖艶な看板の店が見える。どうやら風俗街のようで婦女らしき女性が通りのあちこちで通りに来た男に声を掛けている。

通りの突き当たり、他の店より大きな作りの店の前に着く。そこでフットは歩くのを止める。そしてマリーに向つて店の方を指差す。「店の中に客人がいるのですか?」

マリーが言うと頷く。言われるまま店に入る。店には体格のいい男が立っていた。流石にフットまでにはいかないが、それでも十分、鍛えられている。

「どうしました? お嬢さん。あいにく、ここは18歳以上じゃないと働けないよ」

男が言つ。慌ててマリーは言つ。

「ち、違います。あの客人を迎えてあがつたのですが……」

「ん？」

男はマリーをじろじろ見る。そしてマリーの上着の襟首に付いた紋章を見ると店の外に出た。そしてすぐに帰ってきた。

「いや、悪かったね。ファーストさんとじろの方だね。いや、それにして驚いたよ。あんたみたいなお嬢さんが従事しているとは」ニヤつきながら男が言つ。その顔を察知しマリーは赤面し言い返す。

「その……あれではないです。屋敷でメイドを務めているマリーです」「え、そうなのか。てっきり……新しい趣向かと思つたんだが」

「違います！」

さらりとマリーの顔が赤くなる。

「悪い悪い」

男はマリーに謝るとカウンターのベルを鳴らす。すると店の奥から2人の娼婦が現れる。「シェリー、ミゼル、仕事だ」

シェリーとミゼルと呼ばれた女性がマリーのところにやってくる。それから男にシェリーとミゼルを紹介される。

「それではお二人様、ご一緒に」

そういうてマリーは外へ促す。2人の娼婦はマリーに続き、店の外に出る。外でフットが待っていた。シェリーは一瞬だけ驚いたが、驚いたのはそれっきりだった。どうやらマリーが居たので、それほど驚かなかつたのだろう。フットは娼婦達に指で合図をする。二人を指差した後、自分の背中の馬車を指差す。どうやら乗れというこうとしたらしい。マリーが一人を背中の馬車へ乗るようになれる。二人が馬車に乗り込む。それを確認するとまたマリーに指で説明を始める。まずフットが馬車の屋根に紐で巻きつけてある幌布を垂れ下げる。そしてマリーに向つて幌布の先についてある紐を指差す。マリーは紐を持つ。さらにフットの指説明は続く。馬車の底側面に金属で出来た輪を指差した。どうやら輪に紐を結ぶという事なのだろう。

「フットさん、紐を輪に結べばいいのですか？」

フットは頷く。マリーは言われた通りに紐を輪に通し結ぶ。する

と鉄と木でむき出しだった馬車の骨格は覆い隠され、中の様子見えないようになつた。それを確認するとマリーに「乗れ」と合図する。マリーも馬車に乗り込む。そしてフットが歩き始める。

「//ゼルよ。そしてこひかの子がショリー」「

ミゼルが改めて自己紹介する。ショリーも会釈する。

「マリー・フローベルです。マリーと呼んでください」

「よひじくマリー

ミゼルが答える。

「それにしても驚きました。あの屋敷にあなたのよつなメイドが居たなんて」

「いえ、私もメイドとして屋敷に仕えたのはひと月前からなんです  
「そうでしたか。それでマリーは夜のお努めもされているの?」

「いえ、違います。ただのメイドです」

慌てて答えるマリー。

「そうなんですか。私はてつくり…」

「てつくり?」

興味深々にマリーが答える。

「いえ、そのままの言葉です。の方は若い子をこし所望しますものですから」

たしかにミゼルたちもマリーとそつ大差はない。たしか18歳以上とファーストが言つてこたことを思に出す。それにしても先ほどからショリーは喋らない。

「あの、ショリーさん、どこかご気分が悪いのですか?」

するとミゼルが答える。

「いえ、この子初めてなので緊張しているのです」

「そうだったんですね。失礼しました」

マリーはショリーに謝る。するとショリーがマリーに向つて話す。

「いえ、すいません。なにぶん、屋敷へ行くのは初めてなものでして。それにお迎えの方も。前々からミゼルには聞いていたんですけど実際にお会いになるとビックリしてしまいましたの。それに、なん

でも屋敷の殿方はとても激しいお方とお聞きしたもので、満足なさつて頂けるか、心配で」

「その心配は不要よショリー。それよりも私たちが満足しすぎて先に倒れなさいよ」

話の内容はマリーには強すぎたせいか耳まで赤くなる。話の話題を変えなければとこっちが恥ずかしくなる。なんとか話題を変えよう頭をひねるマリー。

「ところでミゼルさんはフットさんを知っている様子でしたが、もう何度か屋敷には来られたのですか？」

「いえ、今回が2回目です。最初、フット様がお迎えにあがつたときは驚きましたよ。誰も付き添いが居ませんでしたし、そのとき『私はわたくし』一人でしたから。あの時はいきなり、フット様から手紙を渡されて、それはもう今日のショリーとは比べ物ならないほど驚きました。でも実際に会ってみるととても優しい方を分かりましたから」

「そうですよね」

話をしているとフットの足が止まる。

「あら、もう着いたのですか？」

ミゼルとショリーが顔を見合わせる。

外の様子を見るマリー。どうやら、いつも食材を調達する店の前だつた。そういうば買物がまだだった。マリーは急いでパーソンから頼まれたものを買い、馬車に戻る。馬車の中で年端の変わらぬ少女達はお喋りに夢中となつた。それから1時間ほどして屋敷に戻った。帰り道もフットは同じようにスノープウラを引いた。

屋敷に戻るとパーソンが食事の用意をして待つていた。ファースト、ミゼル、ショリーが先に食事を済ませ2階へ上がる。その後、マリーとパーソンが食事を始める。しかしフットの姿が見えない。

パーソンに尋ねる。

「あの、フットさんはどうしたんですか？」

「フットなら自分の部屋に戻ったよ」

「自分の部屋ですか？」

帰つてからフットを館内で見た記憶がない。いつの間に戻ったのだろうか？

「フットの部屋ははなれの塔にあるから。それにこの椅子やテーブルじゃフットに合わないだろ」

マリーには塔への入室は許可されていない。それで見なかつたのかと納得した。それにこの部屋のテーブルも椅子もフットには小さすぎる。でも食事はどうする？

「フットさんはどこで食べるんですか？」

「彼は自分の部屋で食べるよ。もう僕が彼の部屋に運んだから心配しなくていいよ」

そうなのかなと思う。それにしても1人で食事をするのは寂しくないのかとマリーは思った。

「一緒に食べないんですか？」

「彼は1人で食べる方が好きなんだ。それが彼の希望だから」「そりなんですか？」

そう言つと2人は食事を続けた。食事が終わつといつものように付けに入る。そして1田の仕事も終わり、ベッドに転がり夢の中へマリーは落ちた。

夜中、田が覚める。1階の便所へと部屋を出るとロビーを挟んだ向こうの部屋から細々と光が漏れている。ファーストの隣の部屋のようだ。そういうえば食事を終えてから3人は2階に上がつた。マリーの中で好奇心が芽生える。忍び足でロビーを渡り反対の部屋に行く。

そして、部屋の前で扉に耳をこすり付ける。部屋の中から女の吐息と喘ぐ声が聞こえる。マリーは手に汗をかいて耳に神経を研ぎ澄

ます。きしむベッドの音が聞こえる。甘い声が2つ。ミゼルとシリーのようだ。先ほどから鍵穴から漏れる光に気が付く。ゆっくりと顔の位置をずらし鍵穴から中の様子を見る。部屋の中は薄暗いため、ぼやけて見える。徐々に目が慣れ始める。

ん？

マリーは自分の目を疑う。この屋敷には自分を含ませ女性は3人しか居ない。だから身体のシルエットでミゼルとシリーと判断できる。しかし相手をしている男のシルエットがファーストにしては細い。

もしかして？

しつかりと瞳を広げ部屋の中を見る。

もしかしてだった。

相手はパーソンである。

え、えー！

心の中が騒いだ。

まさかであった。

1人でパニック陥つていると突然、後ろから口を押さえられた。

「むぐぐ」口を押さえられて声の出ないマリー。

「おつと。声を出しちゃいえけねえよ、マリー穰ちゃん。キヒヒイ」小さな声が耳元でわざわざ。聞いたことのない声だった。しかし声の主の言う通りで、ここで大声を上げると覗き見がばれてしまう。マリーはおとなしく従う。

「よし、いい子だ。それじゃ、今から手を離すからゆっくつといち向きな」

言われるがまま、ゆっくつと声の主の方へ身体の向きを変える。

目の前にはマリーと背丈の変わらぬ男が立っている。歳は30代ぐらいだろうか？ 男の顔には顔半分もある立派な鷺鼻をしており、緑色の森の民が着る服で身を包んでいた。言つてはなんだが、その容姿から盗賊の類にしか見えない。しかし自分の名を知っている以上、屋敷に縁のあるものと判断した。

男はずっと白い大きな歯を見せて「ヤーヤーして」と。ひたひそ声でマリーに叫ぶ。

「マリー、穰ちゃん、覗き見はいけねえとあ

男に言われ首を縦に振るマリー。

「そうだろ。穰ちゃんは何も見なかつたあ。そして今から部屋に戻つて寝るう。そして起きたときにはあ『ああ、私、なんて変な夢をみたんだろ』って思つた。これイイだろ」

男はマリーに詰め寄つて叫ぶ。マリーはまた首を縦に振る。

「そうだろ、そうだろ。だからマリー、穰ちゃんは部屋に戻るひつたあ。キヒヒヒ」

男に言われマリーは便所に行くことも忘れ部屋に戻つた。部屋に戻る前にもう一度、振り返つたが、もつ男の姿はなかつた。

5

翌日、ファーストとパーソン。そしてマリーで朝食を取る。ミゼルとシエリーはまだ部屋で休んでいるとのことだった。昨日の出来事があつてマリーはパーソンと会つとい田をそらしてしまつ。食事中、ファーストとパーソンの顔をちらちら見るマリー。昨日、先に2階へ上がつたのはファースト、でも部屋で……居たのはパーソン。それにあの鷺鼻男。そうやつてずつと考えては2人の顔をちらちら見る。

「さつきから何見てんだ。何か顔についてるのか?」

ファーストに怒鳴られる。

「いえ、すいません。なんでもないです」

パーソンも心配そうにマリーの方を見つめる。

「そうだよ。さつきから変だよ」

「ごめんなさいパーソン。なんでもないから。」馳走様、私、食器洗いに行きます

そう言つと、その場から離れた。

ミゼル

とシエリーが起きたのは昼過ぎであった。遅い朝食を取る。

それから少しお茶を飲み一息ついて街へ帰る。もちろん街まで送る。

「マリー、そろそろお二人を街まで送つてくれ

パーソンに言われ「はい」と返事する。

「じゃあ、フットさんを呼んできましょうか？」

マリーはパーソンに尋ねる。

「いや、いい。それに今日はマリー一人で送つてもらうから

「え？」

どうやって？ 表情に出た。笑つてパーソンが言う。

「いや、フットみたいにじゃなくて馬を使ってだよ。練習して、だ  
いぶ立つからそろそろ実践をと思つて」

「そうですか」

正直、あまり自信はないが仕事は仕事なのでしない訳にはいかない。

「それじゃ僕は2人の準備が出来たらお連れするから、先に庭に行  
つておいてくれ。今日は馬車の準備出来ている。明日からはマリー  
1人でやつてね」

そう言われ庭に出るマリー。庭には2頭の馬が馬車に繋がつてい  
た。大きさは昨日、フットが背負つたものより一回り小さい。フッ  
トはさらにあの金属の塊で出来たスノープウラを引いていた。彼が  
本来、なぜストロングマンと名乗っているのか理解した。

「それにしても、私ちゃんと馬車操れるのかしら。今から心配だわ  
1人ため息をつく。

「大丈夫だよ。マリーお穰ちゃん。2頭とも賢くて優しいのを選  
んでるからよ。キヒヒイ」「

この声は！

手綱を引く台座から、鶯鼻男が現れる。

「あなたは、昨日の！」

「覚えてくれていたのよ。マリーお穰ちゃん

「覚えるも何も昨日のことじゃないですか。一体、あなたは誰なんですか？」

そこまで言つたところでパーソン達がやって来る。パーソンが男に声をかける。

「スナイプ、準備は出来たかい？」

この男の名はスナイプの言うのか。スナイプと呼ばれた男がパーソンに手を振る。

「あら、スナイプ様、御機嫌よう。こつ街へお戻りになつたんです？」

どうやらミゼルも知り合ひらしい。

「ミゼル穰ちゃん久しぶりださあ。昨日の夜帰ってきたんだあ。キヒヒ」

そのやり取りを見ているマリーにパーソンが声をかける。

「マリー、彼はスナイプ。フットと同じく我々の仲間だ」

「改めてえ宜しく。マリーお穰ちゃん。昨日はけやんとひ前言わなかつたけどお

スナイプがマリーに言つ。

「昨日？」

パーソンがマリーを見る。

「いや、なんでもないんです。ねえ、スナイプさん」

スナイプの顔がニヤ付く。スナイプもパーソンになんでもないと言つ。そうなの?と不思議そうに首を傾げるパーソンだった。

急いでミゼルとショリーを馬車に乗せ、手綱を握るマリー。急に手際が良くなる。そして出発する。

「それでは行つて来ます」

「え、ああ。いつでらつしゃい」

パーソンが手を振る。パーソンの横でスナイプも手を振り見送る。

山道の途中、よつやく馬車の扱いに慣れてきたマリー。よつやく

後ろの一人に声をかける。

「ねえミゼル、ちょっと聞きたいんだけど?」

「なに?」

「あの、その……昨日のことなんだけど。昨日のお相手は?」  
言いづらかつたが気になつてしようがなかつた。

「もちろんファースト様でござりますよ」

「えつ? ジヤあシェリーは?」

「私もミゼルと一緒にファースト様にご奉仕しました。あの、どう  
かしました?」

「あ、いや気にしないでなんでもないから」

そういうとマリーは手綱を握り締める。内心、相手がパーソンで  
なくて内心ホッとした。いや何を自分はいっているのだろう。別に  
パーソンが何をしようと自分には関係ないことなのに。

「そういえばミゼル、スナイプさんと知り合いみたいだけど。屋敷  
に行つたのは今回が2回目なんだよね?」

「ええ、マリーは知らないと思うけど、この街は男の人が持ち回り  
で城砦の護衛をしていますの。いつもファースト様のところからはス  
ナイプ様が護衛に勤めています。なにせスナイプ様は『』の名手です  
から」

「それに女子供に護身術を教えているのよ。だから街の女子供の間  
ではスナイプ様は信頼が厚いの」  
珍しくシェリーも話に加わる。

「へえ、そなんだ。知らなかつた」

そうこうしているうちに店の前に着く。

「ありがとうマリー」一人がマリーに言つ。久しづりの同世代の子  
と話せたマリーにも久方ぶりの楽しい時間だった。

「それじゃ、次の子を呼んでくるね

シェリーが店に急いで戻る。

「次の子?」

「知らなかつたですか？」女の子は4日間、入れ替わる。私たち  
が行つたから、あと3日になるわ。だから明日もマリーに会えます  
わね」

うれしそうにミゼルが言った。4日間つてパーソンが言つていた  
ことを思い出す。まさか4日間も……。マリーの顔が赤面する。そ  
んなマリーの——初心——うぶさを見てミゼルがくすくす笑う。そん  
なミゼルの様子に自分がとても幼く思えた。

ほどなくしてシェリーが2人の少女を連れてきた。  
そして昨日と同じように屋敷へ少女を連れて行つた。

7

あつという間に4日が過ぎた。普段の仕事に戻る。ただ違うのは  
ファーストやフットが西の塔から何やら大きな道具を引っ張り出し  
ている点であつた。

道具の準備だそうだ。そうヴァンパイアキラーとしての仕事ので  
ある。庭には特大の馬車が止まっている。まだ馬はつなげていない。  
そこへ次から次へ荷物を運ぶ2人。とくに巨大な荷物はフットでな  
ければ運べないほどの大きさがある。出入りの許可がないマリーは  
掃除の合間をぬつて、ちら見するが西の塔の様子は分からなかつた。  
それから2日が経つ。庭には馬屋にいる8頭の馬、全てが繋がれ  
ている。しかしその場にいるのはファーストとパーソンしか居ない。  
そして馬車に乗つているのはファーストのみである。

「じゃあ、行つて来る。マリー、屋敷のことは頼んだぞ」  
「はい。でもパーソンは馬車に乗つてないみたいですが」  
「パーソンは屋敷に居るが、パーソンにしか出来ない仕事をしても

「うう

よく分からぬが、パーソンも仕事に関わるらしい。

「わかりました」とマリーは応え、パーソンと共にファーストを見  
送る。

ゆっくりと馬車が山を下りる。そして馬車が見えなくなった。

「そういえばフットさんやスナイプさんもいなかつたんですが屋敷にいるんですか？」

「いや、2人は先に行つたんだ。向こうでファーストと落ち合つことになつてゐる」

馬車で一緒にけば面倒でないのにと思つたが、これも作戦なのだろうとマリーは考える。屋敷に戻るパーソンに付いて行く。

2人だけの夕食が終わる。そしてパーソンが話始め。

「マリー、これから僕は仕事に入るため西の塔に3、4日こもる。もしかしたら早くなるかもしれないし、もっと長くなるかもしれません。だから屋敷の仕事は君に任せる。だからいつもより仕事量は減らしてもらえればいい」

「パーソンそれは分かつたけど、食事とかは大丈夫なの？」

「ああ、心配しなくても干し肉やぶどう酒が塔の倉庫にあるから大丈夫だ」

塔の事は分からないのでパーソンのいう事を信じるしかない。それにしても塔にこもつて何をするのだろうか？ 詮索は出来ない。当面のマリーの仕事は主達の居ない屋敷を管理することだ。

「それでいつから塔に入るんです？」

「今から」

「今からですか？」

「うん、急で悪いんだけど、後のこと頼んだよ」

そういうてパーソンは衝動を出て廊下から塔の入口に入る。そして閉まつた扉からガチャリと鍵の掛かった音がした。

そしてマリーはパーソンが出てくるまでの間、屋敷を守ると決意した。

扉にもたれるパーソン。

「うつ」とパーソンが唸る。

そして眼球が上転する。20秒ほどそれは続いた。上転して白目になっていた目に瞳が戻る。

「さて、ここからは私が指揮を取ろう。パーソンは皆に伝えろ。それが君だけの唯一の能力だから」

声の調子が変わった。身体も全体的に引き締まる。そして真っ暗な塔内を迷うことなく歩く。そして塔の最下層から続く地下室にある一室の部屋へ入る。一本の蠟燭に火をともす。部屋は薄暗く、その様子を表す。簡素な机と椅子。そして重厚な木で出来た棺桶があつた。

「現地に着いたようだな。」<sup>盾</sup>ファースト、準備が出来たら教えてくれ。事前にストロングマン<sup>矛</sup>とスナイプに調査させてある。状況については2人に聞け。私はそろそろ眠る。眠つたら2人を起こせ。<sup>棺桶</sup>なにもないと思うが。何かあれば誰でもいい、箱に入れ。私の<sup>操り人形</sup>素体も一体、馬車に積んである

誰も居ない部屋でパーソンは呴くと棺桶の中に入つた。

ブーン

空気が唸る。

肉片の飛び散る音がする。

骨の砕ける音がする。

ここはフレームという村の辺りである。隣にあるサンナという村へ行く途中道で交戦が始まる。村は山岳麓に転々とある。

この地域はヴァンパイアによつて襲われた村人……いや食屍鬼じょくじきことグール達によつて占領されている。

グールはヴァンパイアが人の生血を吸い尽くしたことによつて生まれる人の肉を食べる怪物である。グールの容姿は生前と変わらないため判断しにくいか、肌の色が不健康に白や灰の色をなしている。この雪山で素足や防寒対策がされてないという不自然な様子から判定は簡単であつた。

現在ファースト、フット、スナイプがこれらと戦闘状態である。近づいてくるグールを殴り散らすフット。彼の豪腕から繰り出される拳はグール達の頭蓋骨を潰し肉片と骨を吹き飛ばす。グールは頭部か心臓にとどめを刺さなければ、活動を止めない。

フットの拳は群がるグールを吹き飛ばす。運よく倒れた生き延びたグールはファーストによつて踏みつけられ剣でとどめを刺される。遠くから近づいてくるグールの頭部にスナイプの放つクロスボウの矢が次々と打ち込まれていく。

「よつやく、片付いたさあ。それにしても、相当な数だ。しかし、おいらは気になつてしょうがない。なあファーストはこいつらどう思つう？」

「様子が変だ。支配されていない。たしかに数が多い。しかしこい  
つらは点でばらばらに動いている」

「でしょ」とスナイプ。そしてフットも頷く。

「考えられるのは」

「ヴァンパイア化だなあ」とスナイプがファーストの言葉につづく。

「ああ」

ヴァンパイア化、それはダムピールが死ぬときに起きる現象である。ダムピールは2度、生まれ変わる。最初はダムピールとして、そしてダムピールとしてその一生を終えるとヴァンパイアとして生まれ変わる。それは自我の崩壊を伴つて。そのためダムピールがヴァンパイアになったことをはぐれ者と俗に言つ。はぐれ者は著しい知力の低下の代わりに身体能力が何倍にも膨れ上がる。

今回、彼らの依頼はヴァンパイアとグールにされた村人の抹殺である。ヴァンパイアは戦闘においてグールを使うことは滅多にない。使つことは、ヴァンパイア世界において「己の力がない」ということを世間に示してしまつため、ほとんどの場合グールを作ることはない。グールが現れる、それは二つの意味を成す。

ひとつはヴァンパイア自身が生命の危機に直面した際、そしてもう

ひとつはダムピールがヴァンパイア化し、手当たり次第に人を襲うときである。

ただ違う点は、グールに対して前者は命令を下す事が出来る点である。

先ほどまでの戦闘で倒したグール達に一過性の団体行動がない。

「依頼内容にずれがあるな」

「そうさなあ。まずは全滅したちゅう村に行かねえと話にならねー よおファースト」

「村に行つて見ないと結論は出せんといふことか」

「そゆこと」スナイプが再び歩き始めた。2人も後に続く。

2

それは4日前に遡る。ブレーメ村の使いが仕事の依頼のためファーストに接触して来た。内容は隣村のサンナで、ヴァンパイアが現れ、村を襲い次々と村人をグールに変えてしまったというのだ。

そしてグールは近隣の村々を次々と襲っている。現在、グール達がブレーメ村に進んで来ているという。ヴァンパイアの数ははつきり分からぬが、2体の可能性が高いと使いの者が言った。ファースト達の仕事は村に巢食うヴァンパイアの抹殺とグールになつた村人の処分であった。内容からヴァンパイアハンターでも十分対応出来る内容であったが、村々の人口の3分の2がグールになつていると思われるため、複数のハンターを雇うことになる。しかしほとんどのハンターは単独行動である。己の自信、信念を持つため連携行動を苦手としている。そのため多勢の依頼ではハンター同士の折り合ひがつかない事しばしある。そこでファースト達のような連携作戦を得意とするヴァンパイアキラーに依頼が舞い込んできたのだ。

『.....』

サンナ村に着いた3人は怪訝な表情を浮かべる。村の建物は破壊され入っ子ひとりいない。まさに死んだ村であった。

「こいつは酷い」

めずらしくスナイプがまじめな口調で喋る。

「まだ結論には早いが、恐らくヴァンパイアではない可能性が高いな」

ファーストの言葉に2人が頷く。

「こんな見境のない破壊の仕方はあ、どうみてもはぐれ者としか思えよお」

「依頼では2体の可能性があると言つていた。確認してみなれば

分からぬ

そこまで言つたところで一瞬、ファーストの動きが止まつた。

「臭うぞ」

スナイプがクロスボウを構える。フットは背後を見渡す。小声でファーストがスナイプに囁く。

「人の臭いだ

左奥の建物を指差す。

首を縦に振るスナイプ。身軽な動きで建物の背後へ回る。ファーストとフットはじりじりと近づき間合いを詰める。

「動くな

後頭部にスナイプがクロスボウを突きつける。

少年だった。歳は14、5歳に見える。

スナイプは少年の手を背中にまわし、家の壁に押し付ける。

「放せ」少年が声を立てる。

ファーストとフットがやつて来る。

「ガキか。スナイプはなしてやれ」

自由になつた少年がガツと後ろに飛びファースト達と間合いを取る。

そして睨む。

「お前たちも姉ちゃんを殺しに来た奴らだな」

「姉ちゃん? 誰のことだ。坊主よお」

怪訝な顔でスナイプが答える。

「とぼけるな」

少年は一人で興奮している。どうやらお互に話の接点がないようであった。ファーストは素早い手さばきで剣を少年の鼻の前に構える。

「わっ!」

少年は雪の積もつた地面に尻餅をつく。

ファーストがゆっくりと少年に話しかける。

「おい、ガキ。俺たちは村からグールとその親元のヴァンパイアを

殺せと言われている。お前の言つ姉ちゃんとやらばヴァンパイアなのか？」

「姉ちゃんはヴァンパイアなんかじゃない！　ただ……」

「ただ？」

ファーストが少年に問う。しかし問う時間もなくファーストは「ふう」とため息をつき剣を構え直す。

「囮まれたなあ」

横目でスナイプがファーストに言う。

「ああ。なんて間の悪い連中だ。おいガキ、そこに隠れている。グール達のお出ましだ。まだお前に聞きたい事がある。喰われるんじゃないぞ」

ファースト達が武器を構え戦闘体勢に入った。

目視だけでも村の中に相当な数のグールが居る。たぶん外にも待機しているのもいるだろう。先ほどからグール達は止まっている。まるで命令を待っているかのように。

「どうやら、こちらは依頼の得物が使っているグールのようだ」

「道の途中であつたのとは違うなあ。統率されている。さて主はどうにいるのかねえ」

そう言つてスナイプはきょろきょろ辺りを見渡す。スナイプはさらに空を見上げた。空は雪の積もつた大地のように白と薄い灰色で何もかも包み隠している。しかしへスナイプの目は何かを捉えていた。

「上え！」

「飛行タイプ。ドラムロ一族か」

「来るう」

スナイプが吠える。ファーストは握った剣をさらに強く握り直す。上空から大きな団体が急下降してくる。そして3人の前を横切つた。その後、また上昇し再び急降下してきた。威嚇であった。大きな団体が振り子のように繰り返してくる。3人は威嚇によつて身動きが照れない。その間にグール達が間合いを詰めてくる。

「でかいくせに、ちょこまかとうつとしい野郎だ」

ファーストが苛立つ。スナイプは大きな団体に田を追いながら喋る。

「やつかいな野郎だ。動きに田が慣れてきた。ファースト落とすぞお」

「わかつたスナイプ。あとは任せる。指示をよこせ」

「んじや。次、降りてきたら少し左に奴を動かしてくれえ」

スナイプはフットの背中の後ろで構える。

「フット、盾になつてえ」

頷くと岩のようにその場に踏ん張りガードを固める。フットのすぐ右横でファーストが剣を上段突きの構えになる。

ギューン

風を切る音と共に大きな団体がフットめがけて急下降してくる。しかしフットは動かない。

さら加速する団体はうなりをあげる。

微動だにしないフット。

互いの距離が徐々に近くなる。

10メートル

5メートル

3、2、1

強固な盾となつたフット。その横で剣を構えるファースト。もうすぐゼロメートルに差し掛かった。

ギューッと左に急旋回しようとする巨体。

大きな団体は己の恐怖心に負けた。避けようと左に反れたが判断が遅かつたためフットの横をかすめバランスを崩す。連射式のカートリッジに交換したクロスボウを後方から撃つスナイプ。集中砲火によって左の翼をに風穴を開けられた大きな団体の主。

ズツドオオオオ

巨体が地面の雪中にめり込んでいく。

そして瓦礫に突っ込み静止する。

雪煙が辺りを舞う。

その中から巨体を姿を露にした。

地面上に落ちた巨体、それは大蝙蝠であった。

体長は2メートルほどであろうか。

翼を広げれば10メートルはあるよう見える。

そして成人男性の腕ほどもある鉤爪が不気味に光る。

「ようやく落ちたか」

「あんま手を叩いて喜べねえがなあ」

すでにファースト達の周りには詰め寄ったグール達で囲まれている。その数およそ200体。

「なに、雑魚が何体いようが恐るに足らん」

ファーストはスナイプの腰に収まっていた短剣を抜く。

右手に剣、左手に短剣をもつと両手を広げる。

その場で足に力を入る。

ファーストはその場でゆっくり回転し始める。

それは徐々に速度を増していく。

回転はどんどん高速になる。

まるで小さな竜巻のように。

小さな竜巻となつたファーストはグールの集団に突っ込んでいく。竜巻ミンチが通るとグールの肉片と血が混ざり、白い雪のキャンバスの上に紅の模様がほどばしる。

グール全滅にわずか20秒。

目標をなくした竜巻は徐々に動きを緩め本来の姿に戻っていく。

「終わつたぞ。これで思う存分、手を叩ける」

ハイハイとスナイプが手を叩く。

大蝙蝠がようやく体を立て直す。しかし翼をやられ、上手く立つ事が出来ない。

「おい、ドラムロ野郎。変身を解いたらどうだ?」「ファーストが大蝙蝠に言い放つ。

「ほお、俺の一族を知っているとは」大蝙蝠が喋る。

そして大蝙蝠の姿が徐々に変化し男の形へと変化する。

「村の人間を次々にグール変えている下品野郎つてのはお前か?」すると男が答える。

「貴様は何者だ? あの女の仲間か?」

「あの女?」

そう言えば先の少年も同じ事を言っていた。女とは一体? ファーストの反応を見て男が答えた。

「どうやら違うようだな。俺を殺しに来たのか?」

「そうなるな。お前以外にもいるらしいがな」

「そうか。それで、そのもう俺以外の奴には遭ったのか?」

男は不気味な笑みをこぼす。

「お前に答える義務はない」

剣を構えるファースト。

「おつと、俺はお前たちと一緒に戦う気はない」

「往生際が悪い野郎だ」

「いいや。貴様達に譲つてやつてるんだよ」

「?」

「なにか聞こえないか?」

男が口元に人差し指をあて、耳を澄ますように合図を送つてくる。ファーストは男の指示に従い耳を研ぎ澄ます。スナイプ、フットもそれに続く。

ギューン ギューン

大枝の撓る音が遠くから聞こえる。

「お出ましだぞ。俺の兵隊を皆殺しにした責任は取つてもらうぞ」

男は大蝙蝠に変化すると、すぐさま、その場から飛び去った。

遠目から巨大な雪柱が見える。

村の西方に出現した雪柱は軒々と発生する。

徐々にこちらに近づいてくる。

そして3人の近くでギューンンといつ強い音が近づいた。

スナイプが叫ぶ。

「フット！」

上空の灰色がかつた雲。

その景色の中から何かが高速で近づく。

フットが咄嗟に拳を繰り出す。その間にフットの背後へファーストとスナイプが避難する。

巨体であるフットの体が50mほど地面をめり込みながら後退した。

女だった。

信じられない力でフットの拳に女の手刀が突き刺さっていた。

どうやらヴァンパイアの男と少年が言う女のようだ。

整った鼻筋にアクセントとなっている赤毛。

しかしその瞳に宿るいろは血の様に赤々と輝く。

赤の瞳、それはダムピールが死んでヴァンパイア化した特長である。

「どうやら、こいつで間違いないようだな」

「ああ。それにしてもフットが動くとは、どおりでの腰抜け野郎

ヴァンパイア

が警戒するわけだ。」

「どうする？ 依頼ではヴァンパイアのはずなんだけども。とりあえず捕まるか？」

「スナイプ、こんな状況で冗談言えるのか？ どうみてもそんな余裕はない。出来れば金にならん事は首を突っ込みたくないんだが…

…」

「……だなあ」

そう2人は言つとフットの背中から一気に飛び出し応戦する。

ファーストが剣を振る。女は爪でそれらを受ける。その隙にスナイプが矢を打ち込む。

女は後方に飛びスルリとかわす。  
しかしスナイプもそれに対応し着地予測点にすぐさま矢を打ち込む。

さらに女は大きく飛躍しそれらを避ける。

「予想以上に動くう」

「スナイプ」

ファーストは剣の刃をスナイプに向け見せる。

剣の刃は刃こぼれが酷く、武器としての機能をほぼ失っている。  
「あんだけグール狩つた後に、あんな姉ちゃんとやるからそうなるんさあ」

苦々しく首を縦に振るファースト。

お手上げといった感じで両手広げるスナイプ。

「長引けば、こちらが不利になる」

ファーストが短期決戦の意思表示をする。既に選択の余地は残されていない。

スナイプは黙つてクロスボウに連発式のカートリッジを充填する。装填し終えると、ふうと一息つく。そして2人に指示を飛ばす。

「もう矢がない。悪いがあ、囮になつてくれえ」

意図を汲み取ったファーストとフットは頷く。

ここでケリをつける。

ファースト、フットが同時に女めがけて突っ込んでいく。

フットが連續で拳を繰り出す。

ファーストは村の家の外に放置されていた斧を拾い剣と斧を振り回す。

動きは滅茶苦茶であつた。作戦とは思えぬ素人のような動き。ただ繰り出す攻撃回数が異常なほど多い。

ヴァンパイア化で知能が低下した女は同時攻撃によつてスナイプへの注意が散漫になる。

そのチャンスをスナイプは見逃さなかつた。女が2人の攻撃を避けるため後方に飛んだ。

女に隙が生まれた。

スナイプが女の胸に標準を捕らえ矢を打ち込んだ。風を突き破つて唸る矢。

！！！

グッシュと鈍い音がした。

女の右肩に矢が刺さつていた。

しかし致命傷に至つていらない。

のが外れている。振り返るファーストとフット。

スナイプの体制が崩れている。

その横に先ほどまで建物の中に隠れていた少年の姿があつた。

「姉ちゃん、逃げて！」

大声で少年が女に向つて叫ぶ。

一瞬、女の動きが止まる。

しかし女は再び活動を始める。

そして今度は少年とスナイプのいる方向へ猛スピードで接近する。

「逃げる！」

ファーストが怒鳴る。

女は少年の前で突きの構えになる。

「わっ！」

少年は驚き尻餅をつく。

女と少年の目が合づ。

また女の動きが一瞬止まる。

ブフォーフォフオー！

ファーストの投げた斧が重い音をたてる。

ブーメランのように回りながら。

それは女に吸い込まれるように突っ込んでくる。

しかし女は大きく跳躍し、それを避ける。

スナイプたちのところへ駆け寄つたファーストとフット。

…

数秒間の沈黙が過ぎる。

しかし女は戦闘を続けなかつた。

そのまま瓦礫に飛び移りながら、森の中へと消えた。

少年の前へ近づくファースト。

いきなり少年をぶん殴る。少年は衝撃で雪の中に倒れ転げる。

「貴様、殺されたいのか？ 危うく全滅になるところだつただろうが」

殴られた衝撃で口元を切つたのか血が流れる。

「…ちゃんはそんなことしねえ」

「ああ？」

「姉ちゃんはそんなことしねえ。お前らハンターが姉ちゃんを殺そ

うとするからだ」

「お前が生前、女と知り合いみいだが、俺たちに言わせれば無差別に襲う化け物だ」

「そんなことない！」

少年が怒鳴る。

ファーストが次の言葉を発するがフットよつて遮られる。代わりにスナイプが会話の輪に入つた。

「はいはい。話が終わりそうにないので、ここでストップラ。助かつたんだし、結果オーライでいいじゃない？ ねつ大将」

「ちいっ」と口を鳴らすファースト。

代わつてスナイプが少年に話す。しかしその表情に普段の笑みはない。

「坊や。結果的に良かつたが、大将の言つとおり一步間違えば、全員あの世に行つていた。次からは邪魔すんぢやないぞ。今回は大将がお前さんを殴つたから勘弁してやるが、また邪魔したら迷わずにお前さんを殺す。いいな」

がらりと雰囲気の変わつたスナイプの言動は少年の心を貫く。

少年は生睡を飲んで首を縦に振った。

「さてと」スナイプはいつもの調子に戻る。

「まだ自己紹介がまだだつたさあ。おいらはスナイプ、あっちのでつかいのはフット。それでさつき殴つた大将がファースト。で、おたくの名はあ？」

「……トミー」

「トミー、おいら達は村の依頼でここに来たんだあ。村の話ではヴァンパイアとそのグール達の始末と言われて来たんだが何か知らないかあ？ 村の話ではヴァンパイアはと聞いていたんだがあ、なんだか村の話と違う気がするんだあ。もしかしたらまだ、おいら達が遭遇してないだけなのかもしれないのかなあ」

……

トミーと名乗る少年が口を開く。

「……あなた達も他のハンター達みたいに姉ちゃんを殺しにに来たんじやないんですか？」

「ほかにもハンターがいるのか？」

ファーストが尋ねる。

トミーはこくりと頷く。

ファースト達は顔を見合わせる。

「おい、トミーとやら。俺たちは村から一切、そんな情報は聞いていない。ハンターがいるとは初耳だ」

そしてファーストはトミーにこれまでの経緯を話した。村を襲うヴァンパイアと次々にグールにされ村人の殲滅の依頼を受けた事。サンナ村に行く途中で統率されていないグールを発見し戦闘になつたこと。村に着いて破壊された村を見たこと。村の話と状況が違うことに疑問を抱き始めた事。そして戦闘と村の状況からはぐれ者の存在を疑い始めた事。その存在を確認するため村を調査しようと矢先トミーを発見したこと。その後はトミーも見たとおりの戦闘に陥つた事。

淡々と状況を説明するファースト。

トニーは黙つてファーストの話を聞いた。

「そうだったんですか。勘違いしてすいませんでした」

「それでトニー。実際にこの村で何があった？ お前の言つ姉ちゃんは何故はぐれ者になつた？ そして別のハンターとは？ 知つていることで構わない。教えてくれないか？」

「わかりました。でもその前に約束してくれませんか？ いきなり姉ちゃんを殺さないでください。出来たら捕まえて欲しい。そして話してみたい姉ちゃんと」

ファーストは険しい顔になる。

「正直、むずかしい。彼女はすでにヴァンパイア化している。捕まえるということは殺す以上に危険なんだ。今の我々で彼女を取り押さえれる保障はできない。残念だが、その希望をかなえてやることは俺たちには出来ないと思つてくれ。しいてしてやれることは、これ以上、彼女が罪を犯さないようにしてやる事しか出来ない。すまんな」

……

「やはり、そうでしたか。何となくは気付いていました。本当のこととを言ってくれてありがとうございます……僕も決心がつきました。姉ちゃんのために何かしてやりたい。だから協力してもらえませんか」

「出来る範囲で」

ファーストが答える。スナイプ、フットも頷く。

「それでは僕の知つている事をお話しします」

口家は下級階級の貴族吸血鬼である。

ヴァンパイア達は階級があり、それに伴つて吸血する動物が決まつている。

階級は上級階級貴族、下級階級貴族、無階級で構成されている。人間の血は美食とされ上級階級以外は口に出来ないという掟がある。

そのため下級貴族であるドラム口家は牛や豚の血を吸うことしか許されていらない。

ちなみに無階級は通常、民と呼ばれ、鼠などの小動物の血しか食すことを見られていない。

彼らは10年に一度、上級階級の貴族へ献上するための人間を捕まえるが、数は1人か2人と決まっている。なぜなら上級階級者は、その人間の選別で下級貴族の品位を見定めているからである。大量に連れて行つたところで物の価値が分からぬというレッテルを貼られ自分の地位を下げてしまう恐れがあるためだ。

そして村もほんの数人、生贊をささげる事で治安が維持されるため、お互いこれまでトラブルはなかった。

それに生贊とはいえ殺されることなく、5・6年もすれば無事に帰つてくるのだ。これは現在のヴァンパイアの長であるヴェクタ一王が約200年前に取り決めた。

それから、この200年ヴァンパイアが村を襲うといふことはなくなつた。

## 一章　？（後書き）

次回から二章へ移ります。現在、製作中です。どう表現するのが合っているのか分かりませんが、寝かしてみる？と言つんでしょうか。興奮から冷め自分の作品を見つめ直すといった感じです。また投稿期間にひらきが出ると思いますが宜しくお願ひします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5235w/>

VK（ヴァンパイアキラー）ヴァイエント

2011年10月10日03時11分発行